

矢筒城館跡

(第2次発掘)

——長野県牟礼村矢筒城（空堀）遺跡発掘調査報告書——

1988. 10

牟礼村教育委員会

矢筒城館跡

(第2次発掘)

—— 長野県牟礼村矢筒城（空堀）遺跡発掘調査報告書 ——

1988. 10

牟礼村教育委員会

序

飯綱病院建設着手にあたり、「矢筒城館跡」の発掘が、昭和54年に行われ、一定の成果が収められてまいりましたが、このたび、この病院の東隣りに、飯綱健康管理センターの建設が計画され、宅地造成のため、矢筒城空堀の一部に損傷をうけることになったため、空堀の構造調査を主目的とした発掘調査が、矢筒城第2次発掘として行われました。

山城の空堀の構造は、発掘例が少なく、調査前から注目されるところでありましたが、予想通りの成果が得られ、室町、戦国時代の空堀に、一つの解明が得られましたことは、大きな喜びであります。

ここに、ご指導を賜った県教委文化課、調査をご担当下さった諸先生のご努力、予算をご負担願った村当局、発掘をお手伝い下さった皆様方に、深く感謝を申し上げる次第であります。

歴史や、日本文化を改めて見直し、深めようとする時代を迎えています。この報告書が、その意味でお役に立つことを念じ、更に、この堀の調査を通じて、矢筒城に依存した当時の地域の広がり进行を想うとき、郷土に生きる一人として、また新らたに湧く感慨を、胸に刻みながら、序文といたします。

昭和63年10月

牟礼村教育長 町田清司

目 次

序 文

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会、調査団の構成	2
第3節 調査日誌	2
第2章 調査周辺の環境	5
第1節 矢筒城館跡の地理的環境	5
第2節 矢筒城館跡の歴史的環境	7
第3章 調 査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 第1トレンチの調査	13
第3節 第2トレンチの調査	14
第4節 遺 物	16
第4章 ま と め	18
昭和61年6月発掘調査	

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至るまでの経過

昭和61年度に、飯綱健康管理センターの建設着手が、目論まれていることについて、村教委、村文化財調査委員会は、前年度末にこれを承知し、その対応の検討をすすめた。

7年前「矢筒城館跡」の発掘調査が済んでおり、今回のセンター建設地は、その隣地で、城の空堀の跡の一部がかかるのみであるため、宅地造成の際、空堀を業者が切断するとき、村文化財調査委員で、その構造を土質から見取って、写真その他の記録に残しておけばよいだろうとの、当初の判断であった。

宅地造成の着工が3カ月後に迫り、用地買収も完結した61年の5月上旬、村文化財調査委員会は念のため、県教委文化課へ相談申し上げたところ、5月24日文化課の太田喜幸、小林秀夫両指導主事が、現地調査に来村され、「山城の空堀の調査例は少いので、ぜひ法に基づいた発掘調査をして、その構造を明確にして欲しい」との意向を示された。

これにより村関係者で協議をすすめた結果、工事原因者である飯綱行政組合長から文化庁へ正式に届出をし、事前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図る方針を5月30日に固めた。調査に伴う経費は遺跡所在村の負担とし、調査の実施は、県の委託をうけて村教委が担当する。調査団の団長は、前回第1次矢筒城発掘調査の団長米山一政先生にお願いし、調査主任も前回の矢野恒雄先生に、その他調査員の先生は、県文化課に推せん内交渉方をお願いした。

6月6日 村教委、村文化財調査委で、米山一政先生宅を訪問、団長就任を懇願し、用務山積のところ「1次調査に関連する2次発掘だから引受けましょう」と承諾をいただく。

6月7日 調査員に推せんをうけた古間小学校小柳義男先生、信濃中学校和田博秋先生に、村教委で各校に出向いて調査員をお願いする。両先生とも学校現場をお持ちであり「朝、夕しか発掘現場には行けない」との条件の中で、ご無理をお願いして帰る。

6月9日 調査団現地会議、夕刻現地を見て役場で協議をお願いし、発掘開始は6月16日(月)と決定する。

6月10日 調査会結成、発掘手伝作業員、重機等手配。

6月12～14日 調査現場草刈り等環境整備、マムシの生息地なので充分注意するも、二匹に出会う。蛇のきらいな薬を農協に問い合せて散布する。鎌、熊手、ほうき、つるはし、くわ、ざる、スコップなど発掘作業に必要な用具の集結、幕舎の組立などの準備を整える。

以上の経過を経て、6月16日に結団式、発掘開始を迎えることができた。

第2節 調査会、調査団の構成

1 調査会役員

顧問	平井博文	牟礼村長	理事	丸山弘懿	教育委副長
〃	横山治一郎	村議会議長	〃	高野孝雄	教育委員
相談役	金井庄五	助役	〃	矢野広義	議会文化委員長
〃	保阪茂文	飯綱病院長	〃	岡 隆男	〃 〃 副委員長
会長	小林幹雄	文化財調査委員長	〃	伊藤 基	〃 委員
副会長	清水凡夫	教育委員長	〃	竹田高男	〃 〃
〃	白鳥 耀	文化財調査委副長	〃	岡田 優	〃 〃
理事	井沢信雄	〃 委員	〃	近藤隆治	〃 〃
〃	青山紫朗	〃 〃	監事	笠井 昭	収入役
〃	米沢稔秋	〃 〃	〃	日野範之	総務課長

2 調査団

団 長	米山一政	長野県文化財保護審査会会長
調査主任	矢野恒雄	牟礼村文化財調査委員
調 査 員	小柳義男	古間小学校教諭
〃	和田博秋	信濃中学校教諭
作業協力者	青木行雄	小山栄一 黒田正敏 佐野 潔 伊藤 勉 伊藤ますみ 石川厚子 渡辺君子 神谷工務店 昭和建設企業組合

3 事務局

局 長	町田清司	教育長	局 員	平林一太	社会教育長
次 長	神谷加賀夫	教育次長	〃	梨本克裕	教委主事
〃	中川義夫	公民館長	〃	寺島義一	公民館主事

第3節 調査日誌

6月16日（月） 晴のち曇

午前9時より現地において結団式を行う。参加者は調査団長米山一政先生、文化財調査委員、教育委員会関係、村会議員代表、作業員等28人。

式終了後直ちに作業にかかる。二か所に堀を縦に切るトレンチを設定する。便宜上、南側を第

1 トレンチ、北側を第2 トレンチとする。

まず、重機で表土を除去し堀の堤を切断する。

第1 トレンチは1.4m掘り下げる。堤の土盛りの様子が明瞭に観察できた。

第2 トレンチは堤に石が多く積みこまれている。

6月17日（火） 雨

雨天のため中止

6月18日（水） 曇のち晴

第1 トレンチの底部とおもわれる部分の土を上げる。

第2 トレンチは重機でさらに深く掘りさげる。

6月19日（木） 晴のち曇

第1 トレンチは山際をさらに掘り下げる。石鉢が出土する。堤の表面の石積みの有無を確認するが、当初から石積みは存在していなかったように観察された。

第2 トレンチは深さ3.5m程になり、淡青緑灰色の凝灰質シルト層が出て水がにじみでてくる。ようやく底にたったよう。

6月20日（金） 曇のち晴

本日が発掘調査最終日、明日から断面図の記録にかかる予定。

第1 トレンチも第2 トレンチ同様淡青緑灰色の凝灰質シルト層が出るまで掘り下げ、壁面を観察しやすいようにしあげる。

第2 トレンチは部分的に掘り下げてみるが、壁面の観察やボーリング調査の所見とあわせまちがいなく堀の底であることを確認し側面を観察しやすいようにしあげる。

6月21日（土） 晴

第1 トレンチの壁面にトランシットをもちいて水系を張る（50cmの方眼）。

6月22日（日） 晴

第2 トレンチの壁面にトランシットをもちいて水系を張る。

6月23日（月） 晴

両トレンチの壁面の断面図を作成していく（縮尺1/20）夕刻、両トレンチの上に簡単な上屋をかけて多少の降りでも作業を継続できるようにする。

6月24日（火） 晴のち小雨

第1 トレンチは午前で断面図しあがる。

第2 トレンチは石が多く作業を継続する。

6月25日（水） 晴のち雨

第2 トレンチは石が多い上、深くて作図に苦勞するが夕刻までにはほぼ終了する。

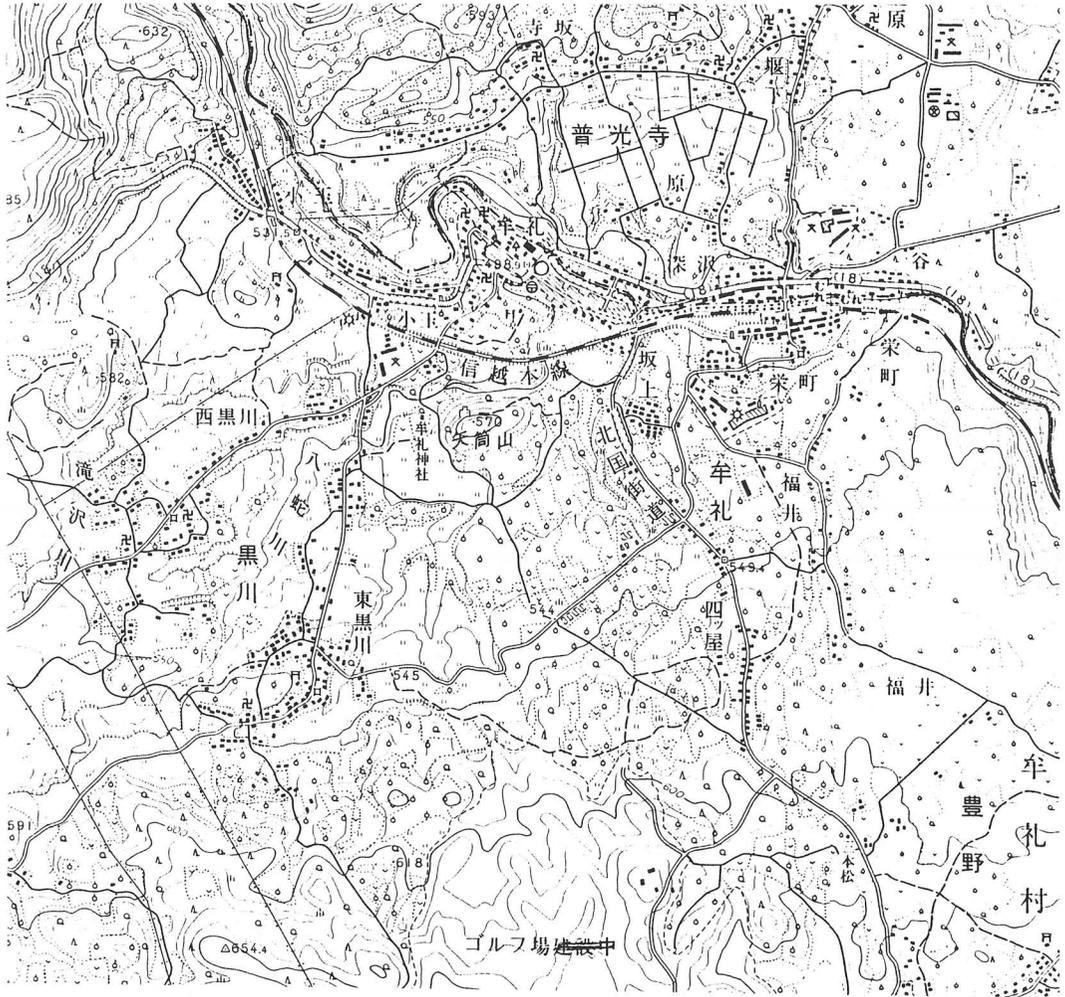
6月26日（木） 晴

午前中、両トレンチの補充調査をし、各断面図の仕上げをする。

午後、念のため重機でさらに下部を掘り下げてみる。

6月27日（金）

壁面の写真撮影終了後機材を撤退する。



第1図 矢筒城館跡の周辺

第2章 調査周辺の環境

第1節 矢筒城館跡の地理的環境

矢筒城館は牟礼村字城山の矢筒山南斜面に立地している。すぐ北側に建てられた牟礼東小学校の位置で東経138度14分、北緯36度44分52秒である。矢筒山の標高は566.7m北麓の下を流れる滝沢川の水面よりは74mの高さで、牟礼盆地のほぼ中央に突出した孤山である。

盆地の北西は信濃町に接し、東北部は鳥居川をへだてて三水村に境し、東南部は白坂峠・髻山頂から三登山にかけて善光寺平の豊野町及び長野市に連なっている。西には標高1917mの飯綱山麓東高原が連なっている。そしてここに水源をもつ八蛇川・渋沢川は小扇状地を形成して東方に流れ牟礼盆地の中央で鳥居川に合流している。

矢筒城山の裏側、鳥居川と渋沢川との間に牟礼本町商店街（旧牟礼宿）が展開している。牟礼本町のバイパスとして新国道18号線が、鳥居川の北側三水村地区に先年開削された。本町の東端には明治21年に開業した国鉄信越線牟礼駅があり、牟礼・三水両村の玄関口として駅前集落栄町が発展している。

気象は裏日本気候区に入り積雪寒冷地帯にぞくし、年平均気温は9.8℃、降水量は928mmである。昭和56年の調査でも牟礼盆地は善光寺平といわゆる上段の高冷地信濃町との中間地帯のため農作物の種類が多い。稲作は一毛作ではあるがその品質が良く、昔から黒川米として知られており、現在は特用米として全国に出荷されている。昭和の初期から果樹園芸が盛んになり、矢筒山の南方大字平出や大字牟礼地区では林檎・桃の生産が増加している。殊に「ふじ」の林檎は適地として有名である。もともと矢筒山の南、大字牟礼地籍は畑作地帯で水田が少なく、天水や沢の水による水田が点在していたが、明治14年小向・横吹・五輪山の地籍が開田され、溜池灌漑がなされるようになった。

矢筒山の東南にはニチアスセラテック工場・信濃空圧工場・信州パスコボトリング工場・溝口製作所牟礼工場（富士通部品関連工場）等の近代工業が進出し、近村の余剰労働力を吸収している。さらにその東方福井山地区には県企業局の手によって福井住宅団地が造成され、目下270戸972人の集落となっている。また南方大字牟礼前高山には長野国際カントリークラブのゴルフ場が開設されている。西方には飯綱東山麓の大字川上に家族旅行村・飯綱リゾートスキー場がオープンされるなど観光開発も着々進展している。牟礼村のシンボル矢筒山の周辺は長野市の（近郊農村）ベットタウン的な性格を強めつつある。

第2節 矢筒城館跡の歴史的環境

〔原始・古代〕

牟礼村には縄文時代の遺跡は20か所あり村の全域に分布するが殊に西地区に多い。中高山からはナイフ形石器・石刃・搔器が出土した（昭和47年発掘）。丸山遺跡では前期竪穴住居址と縄文早期の完全な浅鉢が出土し（昭和53年発掘）、また明専寺遺跡では縄文後期の住居址が発見され（昭和54年発掘）ている。これに対し弥生時代の遺跡は盆地の中央平坦地に分布するが、その数は縄文遺跡の三分之一である。また平出の南部には庚申塚の前方後円墳をはじめ三基の古墳が確認されている。

奈良時代の遺跡はいまだ発見されておらず、平安時代の遺跡が極めて多く26か所も確認されている。そしてこれ等の遺跡は大部分東地区に分布している。西黒川の前田遺跡の発掘では掘立杭の建物・水路跡が確認され、土師・須恵器が出土し稲作文化の痕跡をかすかにうかがうことができた（昭和55年発掘）。前高山窯跡の発掘では登窯跡が確認され地域の開発とその文化の片鱗をのぞかせた（昭和47年発掘）。したがってこの地域の開発は平安期から稲作文化が始められたとみられるのである。その要因としては、律令制下延喜式の官道が多古の駅（長野市三才駅の辺）から沼辺（信濃町野尻湖の辺）に通じていた道筋に比定される地帯に牟礼盆地が存在し、中央文化が伝播されたと推考するものである。

〔中世〕

治承5年（1181）木曾義仲が城長持を横田川原で（現長野市篠井）打破り北陸道を攻め上る途中の遺跡として、本村に字明専寺地籍に義仲が築いたとの伝承をもつ塞城跡があった（圃場整備で破壊）。嘉暦4年（1329）3月太田庄内島津領である黒川・小玉は鎌倉幕府から諏訪上社の課役を割り当てられている（信濃史料）。これは黒川、小玉の地名に関する初見である。永禄11年（1568）武田信玄は島津孫五郎の本領18貫文新地82貫文の夏川を安堵した（現在野村上に築地屋敷の館跡があり）。天正10年（1582）3月5日には上杉景勝は武田勝頼の請によって家来を長沼に出陣せしめ、途中牟礼の地に到着しその指揮を待っている（以上信濃史料）。これは牟礼の地名の初見である。この時の牟礼に至りは矢筒城下であろうと推察される。同年7月13日上杉景勝は武田氏滅亡により代わって島津忠恭に本領として夏河98貫文の安堵状を与え、同時に島津忠直には平出100貫文、黒川郷1000貫文、牟礼500貫文、小玉300貫文を島津領として朱印状を与えている。

〔近世〕

慶長7年（1602）「信濃国川中島四郡検地打立之帳」によると現牟礼村内に村高を持っていた村は次のようである。高坂村68石余、野村上村200石余、新井村143石余、平出村143石余、小玉村314

石余、黒川村839石余、室井(飯)村(現大字牟礼)589石余で黒川が最高である。これは西黒川の殿屋敷周辺の水田地帯が中心で古くからの開発であることがうかがわれる。矢筒城の立地する黒川・牟礼の村高が多いのはやはり偶然ではない。

北国街道牟礼宿の成立は慶長16年(1611)とされている。北国街道の最大の任務の一つは佐渡の金銀を江戸へ輸送することであった。牟礼宿の北からの入口小玉境に金付場(延宝6年検地帳にその名あり)があり、御運上金銀をその場で引き継がれ、翌日は問屋・組頭が付き添って新町宿へ送られたのである。牟礼宿は中期頃から上の酒屋小川家と本陣高野家との対立で、宿場関係の勤務は柏原宿と半月交替となり次第に不振となった。

〔矢筒城館跡の周辺〕

1 矢筒城の領域

矢筒城は別名牟礼城または黒川城とも書かれている。『長野県町村誌』によれば「本村古時太田郷、後柳原荘に属す。黒川村と一村たり。年号不詳二村となり…」とあり、前述のように黒川の初出は嘉暦4年、牟礼の初出は天正10年であるから牟礼は黒川から分離したことは明白である。これ等の名残りの一環と考えられるものに黒川から牟礼への出作がある。延宝6年の「室飯村検地帳」(牟礼神社蔵)によると、室飯村の田畑総石数1362石余に対し黒川村の牟礼への出作が179石余(面積約20町歩)の多きに達している。これは矢筒城下の表町周辺に居住した人が、牟礼宿に移転して、逐次離農したこともあろうか、黒川は中世からその場所に耕作地を保有していたとみられるのである。出作地は牟礼が分離独立の際の線引きの結果であり、矢筒城の初期は黒川郷に立地していたのである。

鳥居川を境に左岸の三水村大字普光寺地籍に、矢筒城主の家老の館址であったとの伝承をもつ字古城(現在水田地帯)がある。また普光寺の性空山普光寺は(浄土宗)「永正年間室飯城主島津秀長(権六郎)最大に修現を加え…」(信濃国普光寺村誌編)とあり、また同村普光峻徳神社(諏訪社)は「当郡矢筒城主の守護神として古例の祭式厳肅なり…」(信濃宝鑑)と伝えている。延宝6年の前記室飯村検地帳に室飯の住人で普光寺村に耕作している水田が57筆、面積にして4町2反余が点在している。明治9年3月普光寺村の「耕地字一等限切絵図帳」には八分一^{はちぶいち}耕地と名のつく水田が散在し、合計55筆で全部牟礼宿住人の所有地である。八分一の地名の初見は延宝6年の徳満寺文書に「前ハ街道裏ハ河限り西ハ八分一道…」とあり、以上からみても延宝の検地帳にある57筆の水田は八分一耕地に間違いはない。とに角普光寺村の八分一耕地は矢筒城主島津氏領有時代の飛地の名残りともみられるのである。

『長野県町村誌』倉井村の項に「永正年間村上氏の幕下牟礼村矢筒城主島津権六郎之を領し、其族島津与四郎本村に住し管理すと云ふ。」とあり、今も倉井の松ノ木に与四郎屋敷の旧跡がある。また明治15年の『上水内郡神社明細帳』には倉井神社の項に「永正年間矢筒城主島津氏寄願アツテ大ニ修理セラルト云」と与四郎屋敷と同時代のことが記されており、倉井村まで矢筒城主の配

下にあった時代のあることを伝えている。

川上村（現大字川上で北川・夏川・野村上）の沿革誌中に「本村字築地に某なるもの字下窪に大久保某居住し、酋長となり世々統し、永正年間初めて室飯城主島津権六郎の領に帰し…」とある。また夏川の真興寺（曹洞宗）については「住古同郡室飯城主島津越前守開基なり。大永年間一字を創建す。」とあり、永正・大永の頃は川上地区も矢筒城主の支配下であったことを伝えている。以上矢筒城主の領域は黒川・室飯を本領として北は善光寺村、東は倉井村・そして西は川上村地方までおよんでいたといえるのである。

2 城下の交通

慶長16年北国街道牟礼宿成立前の交通の中心は矢筒城下の館の地でなければならないとするものである。現在大字平出地区に字室飯道の地籍がある。これは室飯即ち牟礼に達する道という意である。牟礼村国土調査係職員に尋ねてみると「南の善光寺平方面から髻山の西側鞍部を越えて、上平出に下り室飯道地籍を通過し、地蔵堂から表町に達する道筋が、途中所々途切れているが一本通っている。」とのこと。これこそ中世矢筒城館に達する幹線道路の中央路線の名残りともみられるのである。もう一本の幹線道路ともみられるものに城山―表町―四ツ屋―谷地―平出口―番匠―白坂峠―神代―長沼に達する道が現存する。前者の道筋が延喜の官道に平行して善光寺に通ずるの対し、これは初期島津氏太田庄総政所を経て長沼城に達する道で、筆者は白坂道と呼ぶことにする。慶長7年（1602）12月5日海津城主森忠政が牟礼より白坂を経て長沼へ直に往環するよう各務四郎兵衛宛に命じた道筋こそ、上記の白坂道で中世から存在したものと推考される。したがってこの段階では善光寺への室飯道等は横道に格下げされたのである。各務四郎兵衛は長沼城の代官であるから、この文書が大字牟礼に所蔵されていることは、矢筒城下の交通は勿論政治的には本城長沼の指示を受けていたことを物語るものである。

3 城下の古地名

延宝6年の前記室飯村検地帳により矢筒城と館跡に関する中世的な古地名を列記すると次のようである。

○現在使われていない古地名

さから林くねきわ・ついち南・くねきわ・ごうろ・かろうじせぎばた・たて石・石塚・十二平・橋詰丸山・表町の内沢そへ・表町中道そへ・表町西ノ沢・表町中ノ間・清水堀きわ・地蔵堂清水きわ・馬場北ならび・城のこし・城山ね・城宮の北・丸山宮大門南沢・丸山大門道北・城辰堀ノ内・城つみちきわ・城山石かきのくね・古道あと・どぶ古道道下・ぶんご畑・永閑屋敷・狐畑・狐くぼ・皮や屋敷

○現在も使われている地名

うら町・表町・山神・横ぶき・こむかい・五里山・根石・東原一ツ塚・はしづめ・地蔵堂・馬

場・城山・丸山・城山の南たてぼり・前坂びんごの沢

以上の古地名について以下若干述べることにする。

① 城山

牟礼本町に居住される丸山茂樹氏は「祖先は城山の東の辺の丸山という場所から移住したので丸山と名字をつけ、昔は城山の中腹の馬場で馬奉行をしていた。」と証言された。これは上記の丸山宮大門や馬場北並びに全く符号する。検地帳によれば馬場の畑の面積は長さ27間幅24間余である。現在も中腹に平らな馬場跡がある。次に城山南たてぼりであるが今も南斜面に縦堀跡が認められる。所有者仲俣重美氏が祖父から聞いた話によると「この場所はホソッペの畑といい、馬が登ってきたら上にいて追い落すように細長く出来ている。」とのことである。延宝の検地帳には「城山南たてぼり 6間・13間 2 畝18歩」とあり、古くからその存在が確認されていたのである。

② 表町と裏町

矢筒城館跡の外堀に接した前面の南方一帯を表町といい城下の町跡である。外堀に接して東南の方に俗称「オシャゴンジ」と呼ばれる畑地（仲俣常雄氏所有）がある。ここは社軍神の旧跡で諏訪の御社宮司の原始開発の神である。石神は現在牟礼神社境内に移転されている。一昨年仲俣氏は耕作中寛永通宝（寛永5年・正徳4年・明治6年）を発見している。表町の南端で昨年畑地より10個の石臼が出土した。出土地点は前述の室飯道端で湧水のある住居地に適した場所である。次に表町から牟礼宿の成立によって移住したといわれる清水節雄家の墓地（大字牟礼観音寺）に「延徳四季（1492）七月十一日翁□禅道林」と銘のある小さな古い石塔がある。これはまさに矢筒城下の表町に居住したことを語るものである。

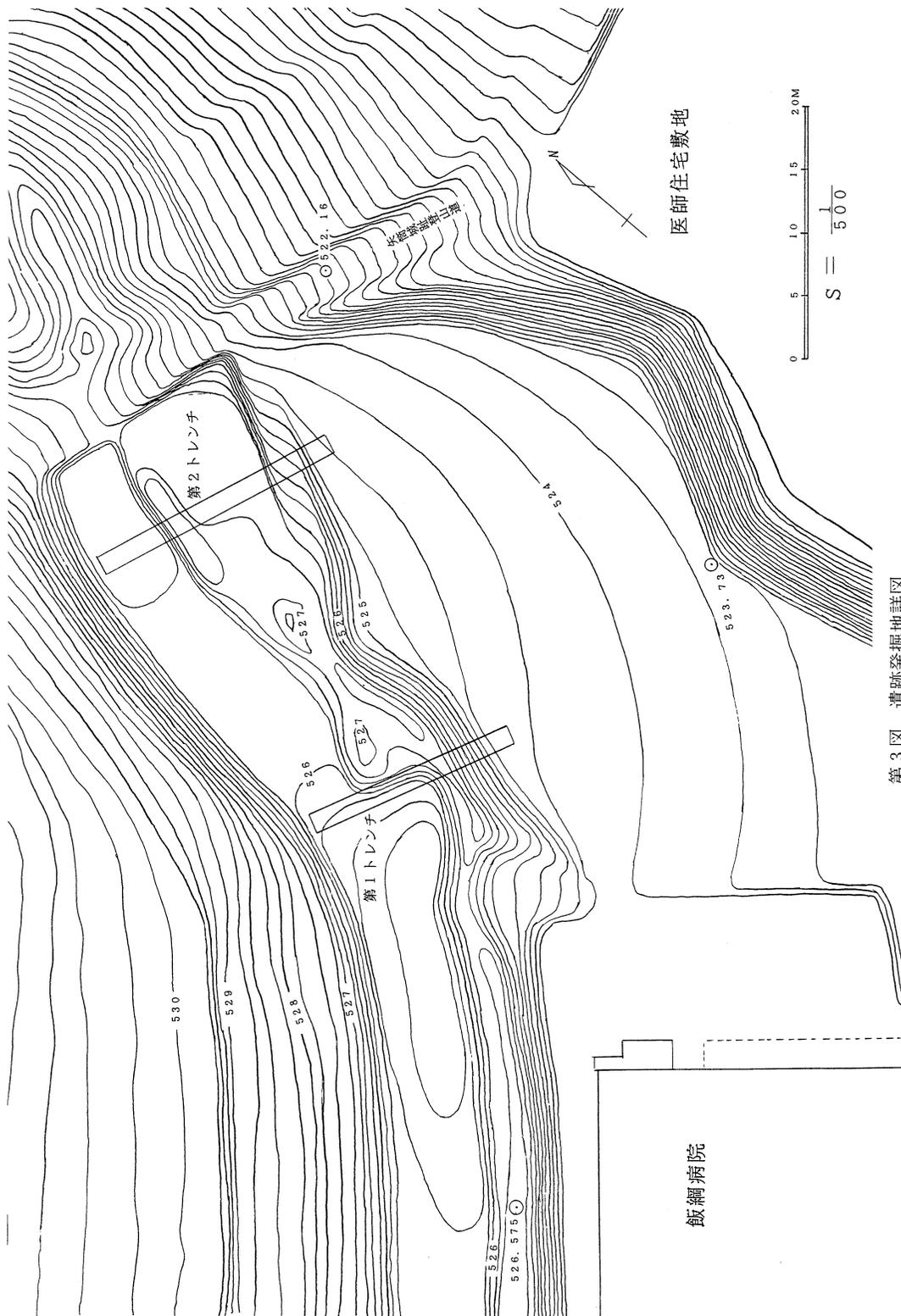
矢筒城の北側に立地する裏町は表町とは異なり湧水すらない。しかし少し下ると滝沢川や鳥居川の自然流がある。現在大字小玉分にも裏町の小字がある。これは牟礼と小玉の両村の境界を決める時に裏町が両方に二分されたものである。延宝の検地帳では小玉よりと推定される辺に「ついち南」「くねきわ」などの古地名があり、家老級の館があったことが想像される。

③ 地藏堂

表町の南端に続いて字地藏堂がある。旧室飯道端に「南無阿弥陀佛、為二親、永正四丁卯三月十一日、本阿弥陀佛」と刻された地藏石造龕が安置されている。土地の人は首切り松の地藏さんと呼んで矢筒城時代の仕置場の跡とされている。当時はここに地藏堂があったが牟礼宿の成立とともに宿場に移転して地藏院といった。文政13年（1830）の牟礼村明細帳には「地藏堂（院）は浄土宗松代大英寺末」とある。現在は大字黒川浄土宗長谷寺檀家で在家になってしまった（当主酒井清吉氏）。同家の仏壇には高さ72cmの石造地藏が本尊として安置されている。おそらく仕置場時代の地藏尊と推定するものである。

④ 殿屋敷と黒川

矢筒城館跡より西方約1.5m程離れた水田地帯の一角に殿屋敷がある（大字黒川字殿屋敷）。昭和54年矢筒城下の館跡が発掘されるまでは、ここが唯一の矢筒城主島津権六郎の館跡であるとされていた。屋敷跡は畑地で平らな地面の区画が認められるだけで未発掘である。北と南は自然の谷地形に囲まれ、東は八蛇川の谷間にのぞみ、西側には先年まで人工的な空堀跡があった。殿屋敷の北側の字前田には浄土宗玉林山長谷寺がある。同寺は矢筒城主島津権六郎が伯母の菩提を弔うために大永5年（1525）字玉林寺の山中にあった玉林山観音寺を、現在地に移転再建したものとされている。境内の墓地には「大永二年朔日妙相院宝誉玉林」と刻された開山塔があったが現在は所在不明である。なお前述のように近くに前田遺跡がある。その報告書には「平安時代後期から中世初期までの竪穴住居と須恵器・土師器が出土した(中略)。黒川はこうした政治の中心的素地が平安期よりすでにつくられていたものと思われる。」と書かれている。殿屋敷の周辺には町田・市楽・やぐら・市ノ口・北ノ台・返町などの中世館跡にちなんだ地名が多い。交通上からは近くに延喜の官道や鎌倉街道に比定される古道筋が通過しており、まさに殿屋敷は黒川郷の政治の中心として矢筒城主の島津氏が居館するにふさわしい場所である。



第3図 遺跡発掘地詳図

第3章 調査

第1節 調査の概要

第1次の調査〔矢筒城館跡発掘調査団 1980〕によって矢筒城館跡の位置、構造など明らかになってきたが、今回の調査によって、さらに、城跡の内堀の構造がはっきりしてきた。

調査は期間等の関係で全面を発掘する体制がとれず、2本のトレンチを設定し、内堀の構造を明らかにすることに重点をおいた。

調査の結果、内堀は幅9mないし12m、深さ3m50cmと規模の大きなものであることが判明した。また内堀にそって構築された堤の高さも南側の平坦面（館側）から2m以上であることも明瞭になった。これらを考えあわせると、矢筒城は本格的な防御体制をもった山城であったことが明確になってきた。

第2節 第1トレンチの調査（第3・4図）

ほぼ、東西にのびていた内堀が北東に向きをかえる地点に第1トレンチを設定した（第3図）。

この地点は畑として利用されていた内堀や一見土塁状の内堀の堤も比較的よく残っていた。また、ここから北東側は、内堀の中の畑が一段高くなっており、はり出した石積みによって内堀の幅も狭くなるように見かけられた。このため、内堀の構造に違いがでてくるのか、石積みは堤構築時のものであるのかを明らかにすることも目的とした。

調査の結果、内堀は、当時の地表面であったと思われる角礫を多く含む黒色土（VI層）、および、その下層の茶褐色粘質土（VII層）を掘りこんでつくられており、当初の内堀の幅は、検出できた範囲でおよそ10.4m、推定で11.5～12m前後、底部の幅が3m60cm前後をしめすことが判明した。（当時の地表面であったと思われる黒色土の掘り込み面から内堀の底までの深さは2m50cmほどである。）

底は山側がやや浅く堤側へ傾斜をみせているが、ほぼ平らである。内堀の側面は45度近くの傾斜をもって堤につながっている。

この内堀に伴う堤の構造も明らかになった。堤は、当時の地表面であったと思われる黒色土の上に内堀から排出された土などを盛って作られたようで、下部には内堀側から盛られた状態を示す黒色土および黄色粘質土の互層が明瞭にみられた（これらの盛り土は一括したV層とした）。

堤の南裾は、当時の地表面であったと思われる黒色土が削られて、館側の平坦面につながっていた。

この平坦面から、堤の上までの高さは2.25mほどになる。堤の幅は下部で、5.6mほど、堤上部

から内堀底部までの深さは3.5mほどになる。

また、当初見られた石積みは、内堀の耕土の上に雑然と置かれた状態を示しており、畑の耕作にともなってすてられたものと判断した。

内堀は、おもに山側(城側)からほうり込まれたと考えられる一かかえもあるような石や、炭化物を混じえた黒褐色土など(一括してⅢ層とした)によって、一度に埋められたような状況が観察でき、石と石との間には空間のみられるものが多くあった。

なお、内堀の底部には自然堆積の状況をみせる黒褐色土Ⅳ層がみられ、構築されてある程度の期間は内堀として機能していたと思われる。

出土遺物は12点。

Ⅲ層から、珠洲焼の大甕破片1点、土師質土器の底部(糸切底)が3点と石鉢が2点出土したほかは、Ⅰ層下部～Ⅱ層表面で出土したもので削り出しの高台をもつ陶器が2点、内耳土器1点、土師質土器2点、すり鉢1点が出土している。

第3節 第2トレンチの調査(第3・5図)

第2トレンチは調査地区のほぼ北東の端に設定した(第3図)。

この地点は、内堀に沿って低い土塁状の石垣と、その南に平坦な面が見られた。ここはまた、現在矢筒城山に登る道路に沿っており、その平坦面の性格をつかむことも目的としたためである。

調査の結果、内堀は第1トレンチと同様に、当時の地表面であったと思われる角礫を多く含む黒色土、およびその下層の茶褐色粘質土を掘りこんでつくられており、一部は淡青緑灰色の凝灰質シルト層にたっていた〔註1〕。

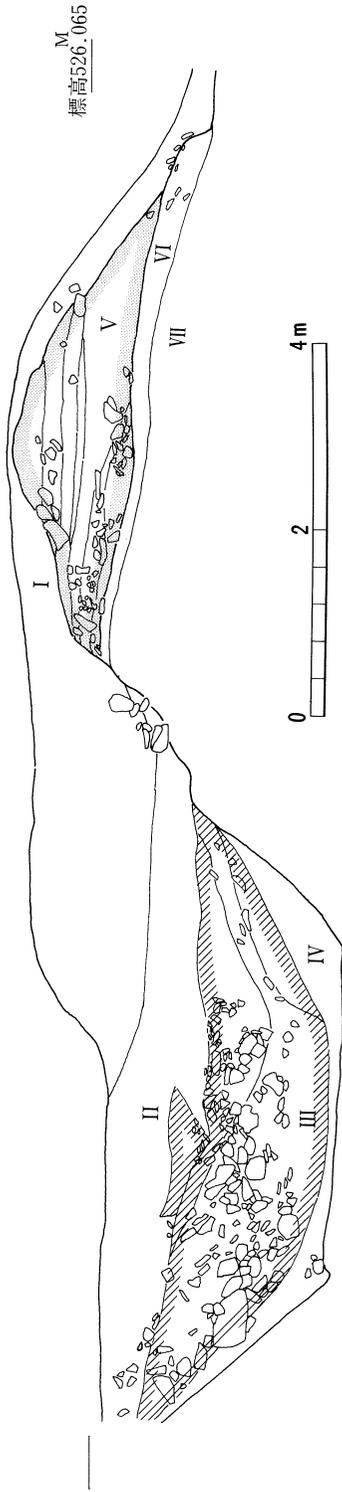
内堀の底は平らで、その幅は、1.6mであった。上部の幅は、北の端が調査範囲外にあって検出できなかったが、検出できた範囲でおよそ6.4m。推定でその幅は9mほどになるものと思われる。深さは3.5mほどである。

内堀の幅は上部、底部ともに第1トレンチで確認したものより2～3m程狭くなるようである。

内堀の側面は、やはり、45度近くの傾斜をもっている。この内堀に接して構築されていた石垣は、内堀の耕土の上に積まれており、畑の耕作にともなって形成されたものようである。しかし、内堀の南に広がる平坦面は、地表面であったと思われる角礫を多く含む黒色土(Ⅵ層)の上に、10cmほどの長さにわたって、50～70cmの厚さの盛り土をして形成されていることが判明した。やはり、ここも内堀側から盛られたように観察された。なんらかの構築物が存在したことが想定される。

この平坦面の南裾は、当時の地表面であったと思われる黒色土が削られて、館側の平坦面に繋がっている。下の平坦面から上の平面までの高さは、1m70cmほどである。

内堀の埋土の状況は、第1トレンチと同様に、山側(城側)からほうり込まれたと考えられる



第4図 第1トレンチ断面図



第5図 第2トレンチ断面図

一かかえもあるような石を混えた埋土によって、一度に埋められたようで、やはり、石と石の間には空間のみられるものが多くあった。

また、内堀の底部には、自然堆積の状況のみせる黒褐色土がみられ、構築されてある程度の期間は、内堀として機能していたと思われる点も第1トレンチの所見と同じである。

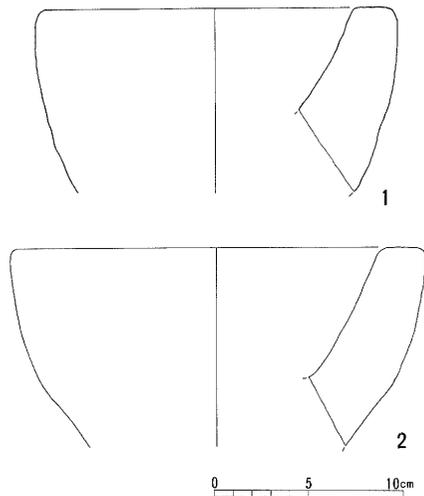
出土遺物は1点。

III層から補修孔をもつ内耳土器の破片が1点出土している。

註1 堀にたまった水の影響により、類似の層を形成することがあるが、第1トレンチ南端10m程の地点(大字牟礼2220番地)でのボーリングによる地質調査でも茶褐色粘質土(VII層)の下部に淡青緑灰色の凝灰質シルト層の存在が確認されている。

第4節 遺物

前回の調査においても遺物の出土はあまり多くなかったが、今回は堀のトレンチ2本のみの調査であったため、埋土中からごくわずかの遺物が出土したにとどまった。土器・陶器・石鉢などの小破片が2～3点ずつ出土したのみである。しかも、図示できるような遺物もほとんどなかったが、若干説明を加えておきたい。



第6図 石鉢

1 石鉢(第6図1・2)

1・2とも安山岩製の石鉢で、いずれも底部は欠損しており、全体の1/6程度を残すのみである。あるいは茶白なのかもしれないが、底部がのこっておらず、判然としない。1は直径約19cm。内面はきれいに擦れているが、外面の形成はやや粗い。2は直径約22cmを測り、外面の成形は比較的丁寧である。底部ぎりぎりのところで割れ残っている。

2 陶器

2点出土したが、いずれも碗か皿の高台部のみ破片である。1点は重量感があるが、やや粒子が粗く、焼成もあまりよくない。削り出しの高台で、底部裏の中心はやや盛り上がっている。黄灰白色の釉がけが内外面ともになされている。もう1点も、削り出し高台であるが、非常に粒子が細かく、堅く焼成されている。底部裏の中心はやや少し盛り上がって残っているが、黄灰白色の釉がけは内外面にのみに施されている。

3 内耳土器

口縁部と胴部の小破片が1点ずつ出土したのみである。

4 珠洲焼

2 cm程の厚さを持つ小破片が1点出土した。

5 土師質土器

いわゆる「かわらけ」と呼ばれる土器であるが、焼成がしっかりしており、日用雑器としての使用に耐え得る土器の破片が数点出土した。近世のものであろう。図示すべきものはないが、内面に鉄釉と思われる釉薬が軽くかけられているものが一点ある。

第4章 まとめ

昭和54年に実施した矢筒城館跡(第一次)の発掘調査に引きつづき、この度は、第二次調査として、この山城と館跡の間にある空堀の一部が健康管理センター建設により、破壊されることに伴いこの空堀の構造調査をするため、県教委の指導もあって、発掘調査が行われた。

調査の結果、堀の深さが堤上より4 m以上も深いことがわかり、当初の予想よりこの築城が、かなりしっかりした構造のものであるとの心証が得られた。

この空堀は、徳川時代に入って要害除去のため、埋められたものと推定されるが、V字型で4 m以上の深さだと、竹棒等を支えに堀を飛び越すことは不可能で、これらを構築するには、かなり広範囲から、人夫を集めたことが考えられ、現在の牟礼村、三水村のほかに、神代、長沼からも、応援があったものと推測される。

いずれにしても、室町時代から戦乱の世において、各勢力の拮抗線上にあるこの平山に、武将が築いた矢筒城は、内堀の深さ等から、要害としての重要性を、再認識させられたものであった。

この発掘により、矢筒城の構造が、大規模な工事により、構築されたとの推測を裏付ける貴重な資料の一つともなることができた。

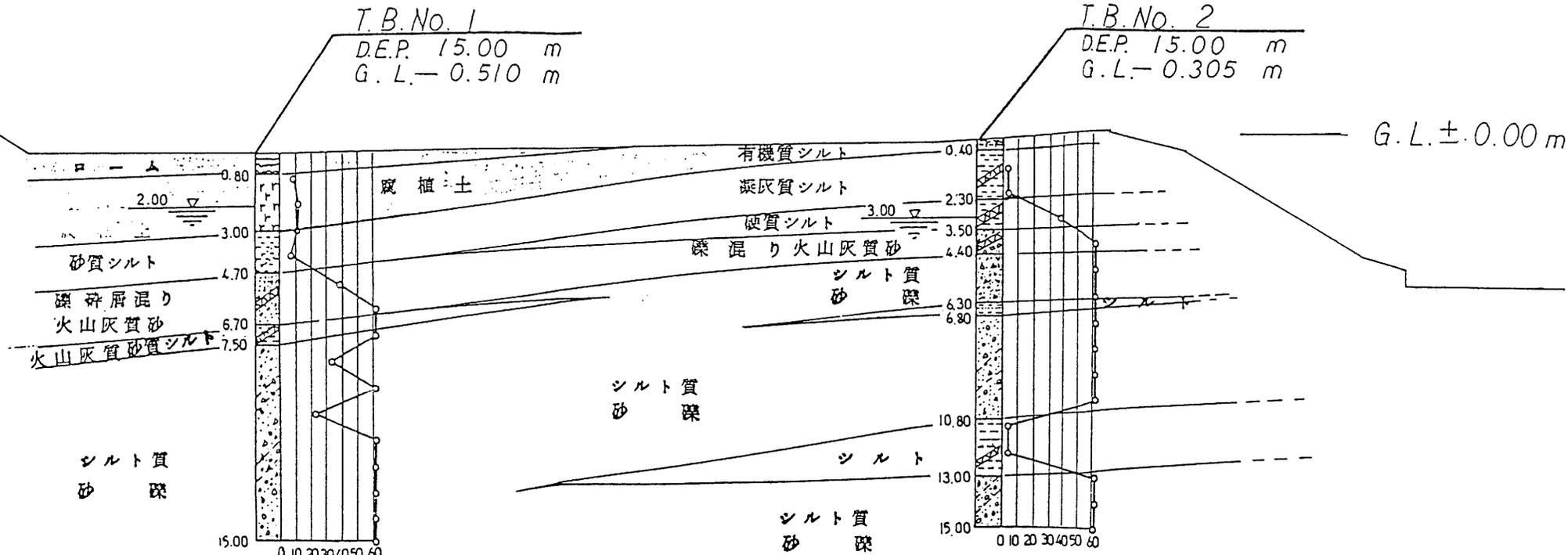
県下でも、山城の堀の発掘例は少なく、今回の調査は、その意味でも文献上貴重な発掘であり、今後、県下の堀の発掘研究に一石を投じたものとして評価できる。

この矢筒城も、まだ空堀の大半が形状を留めており、これを破壊から護るとともに、今後、さらに調査を行い、その結果を整備して、後世に残すことが課題と考えられる。

昭和63年10月

調査団長 米山一政

S = 1:200



第7図 地質断面図

飯綱行政組合健康管理センター新築工事 (建築工事)
 飯綱行政組合飯綱病院リハビリ診療施設新築工事 (建築工事)
 上水内郡 牟礼村 大字 牟礼 2220



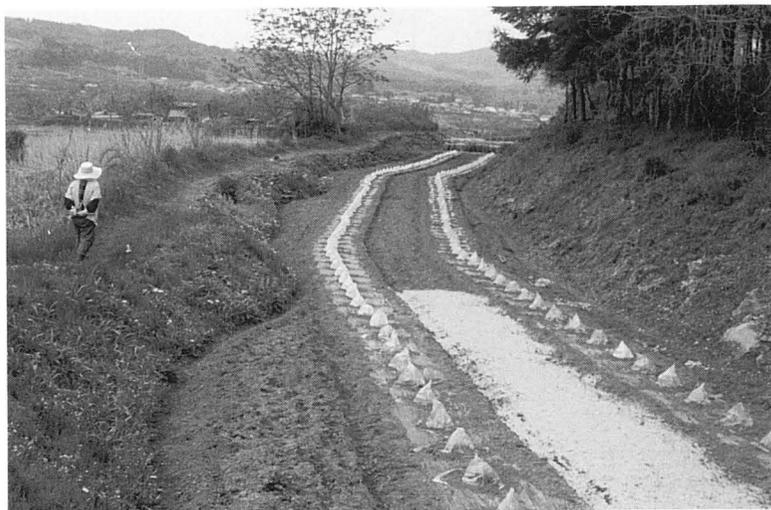
矢筒山全景（南西より）



調査地内堀

図版 2

調査地点より
西方を望む



調査地内堀



図版 3

内堀堤
(第1トレンチ)
断面



同 上

図版 4

内堀断面
(第1トレンチ)



同 上



図版 5

内堀東側平坦地
(第2トレンチ)
断面



同上



図版 6

内堀断面
(第2トレンチ)



内堀調査状況
(第2トレンチ)



矢筒城館跡（第2次発掘）

昭和63年10月25日 印刷

昭和63年10月31日 発行

編集 矢筒城館跡発掘調査団

発行 牟礼村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
